

# おおもと

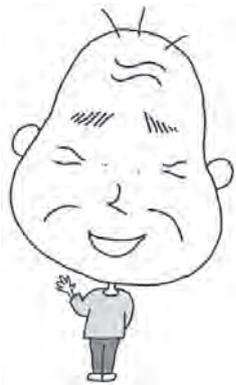
ん！もどしりたい

××××★××× ①

いつも仲良しなおじいちゃんとモンちゃん。元気に、`あそぼ〜、とおじいちゃんの部屋へとダッシュするのがモンちゃんの日課。  
そんな2人が繰り広げる、ちょっとためになる`おおもと、のおはなし…。



モンちゃん



おじいちゃん



わああ



は、あつた  
今日の五回じゃぞ…

モン おじいちゃん、あそぼ〜。  
おじい おお、モンちゃん。今日も元気じゃなあ、ハハハハハ。今、『おほもとしんゆ』を浄書してるから、ちよつと待っててくれるかい。  
モン あ、いつも筆で何か書いてる、あれね。`かいそさま`っていう人が書いたんだっけ？  
おじい よく覚えていたね。正確には、開祖さま

の中に入られた神さまが、開祖さまのお体を使って書かれたんじゃよ。  
モン 本当!? それって、すごいことだね! ねー、おじいちゃん、開祖さまっていったいどんな人だったの？  
おじい おお、よしよし。じゃあ、開祖さまのご幼少: 小さいころのことから話そうかのお。  
開祖さまは、京都の福山市というところでお生まれになったんじゃ。今からおよそ百八十年前のことじゃな。

モン わあー、大昔だね。  
おじい ハハハ。そうじゃな。おじいちゃんが生まれるもつともつと前のことじゃ。

ちようどそのころ、天保の大飢饉とって、大雨の影響でお米や野菜が

できずに、食べ物<sup>たべもの</sup>が不足<sup>ふそく</sup>してしま<sup>たい</sup>う大変<sup>たいへん</sup>な時<sup>とき</sup>だつたんじや。

モン 食べ物<sup>たべもの</sup>がないなんて、みんな困<sup>こま</sup>っただろ<sup>う</sup>うね。

おじい そうじやな。開祖<sup>かいそ</sup>さまの家<sup>いえ</sup>も、とても苦<sup>く</sup>勞<sup>ろう</sup>されたよう<sup>う</sup>で、開祖<sup>かいそ</sup>さまは十歳<sup>じゅうさい</sup>くらいになら<sup>れ</sup>ると、奉公<sup>ほうこう</sup>に出<sup>で</sup>られたんじやよ。

モン 奉公<sup>ほうこう</sup>って？

おじい 他<sup>ほか</sup>の人<sup>ひと</sup>の家<sup>いえ</sup>に住<sup>す</sup>みながら、家業<sup>かぎょう</sup>や家事<sup>かじ</sup>を手伝<sup>てつだ</sup>うことじや。開祖<sup>かいそ</sup>さまの働<sup>はたら</sup>きぶりは、それはそれはすばらしくて、どこに行<sup>い</sup>つても、その家<sup>いえ</sup>の人<sup>ひと</sup>たちに喜<sup>よろこ</sup>ばれたそうじや。

モン うーん、そんなにた<sup>た</sup>くさんお手伝<sup>てつだ</sup>いができ<sup>き</sup>るなんて、すげ<sup>すげ</sup>すぎる…。おじい それだけじやな

いぞ。

開祖<sup>かいそ</sup>さまがまだ幼<sup>おんな</sup>いと<sup>き</sup>、お父<sup>ちち</sup>さんが亡<sup>な</sup>くなら<sup>れ</sup>、開祖<sup>かいそ</sup>さまのお母<sup>かあ</sup>さんは大変<sup>たいへん</sup>な苦勞<sup>くろう</sup>をしてお<sup>ら</sup>れたんじやが、そんなお母<sup>かあ</sup>さんを、開祖<sup>かいそ</sup>さまはと<sup>と</sup>ても大切<sup>たいせつ</sup>に思<sup>おも</sup>われていたのじや。

奉公<sup>ほうこう</sup>先<sup>さき</sup>で出<sup>で</sup>る食<sup>しょく</sup>事<sup>じ</sup>に、お<sup>お</sup>い<sup>い</sup>しい物<sup>もの</sup>や珍<sup>めづ</sup>らしい物<sup>もの</sup>があ<sup>あ</sup>つたり、たまに<sup>たまに</sup>ご褒<sup>ほう</sup>美<sup>び</sup>として着<sup>き</sup>物<sup>もの</sup>の生<sup>なま</sup>地<sup>じ</sup>など<sup>など</sup>をもら<sup>もら</sup>つたりすると、それ<sup>それ</sup>をす<sup>す</sup>ぐにお母<sup>かあ</sup>さん<sup>さん</sup>に届<sup>と</sup>け<sup>け</sup>られたそうじや。

モン 開祖<sup>かいそ</sup>さまのお母<sup>かあ</sup>さん、す<sup>す</sup>ごくうれ<sup>うれ</sup>しかった<sup>かった</sup>だ<sup>だ</sup>ろ<sup>ろ</sup>う<sup>う</sup>ね!

おじい と<sup>と</sup>ても喜<sup>よろこ</sup>ばれた<sup>れた</sup>よう<sup>よう</sup>じや。そ<sup>そ</sup>して、そ<sup>そ</sup>のう<sup>う</sup>れし<sup>し</sup>そう<sup>そう</sup>な<sup>な</sup>お母<sup>かあ</sup>さん<sup>さん</sup>の姿<sup>すがた</sup>を見<sup>み</sup>るこ<sup>こ</sup>とが、開祖<sup>かいそ</sup>さまの喜<sup>よろこ</sup>び<sup>び</sup>でもあ<sup>あ</sup>つた<sup>つた</sup>ん<sup>ん</sup>じや<sup>な</sup>。

モン 分<sup>わ</sup>かる<sup>る</sup>な<sup>な</sup>あ。この<sup>この</sup>前<sup>まへ</sup>、おま<sup>ま</sup>んじ<sup>ん</sup>ゅう<sup>う</sup>半<sup>はん</sup>分<sup>ぶん</sup>あ<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>たら、お<sup>お</sup>じ<sup>い</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>ん<sup>ん</sup>す<sup>す</sup>ご<sup>ご</sup>く<sup>く</sup>喜<sup>よろこ</sup>んで<sup>で</sup>くれ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>から、<sup>から</sup>モン<sup>モン</sup>も<sup>も</sup>うれ<sup>うれ</sup>し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>よ!

おじい え、あ、ま<sup>ま</sup>あ、<sup>あ</sup>そう<sup>そう</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>こ<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>じ<sup>じ</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>…(汗<sup>あせ</sup>)。と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>う<sup>う</sup>わ<sup>わ</sup>け<sup>け</sup>で<sup>で</sup>じ<sup>じ</sup>ゃ、<sup>じゃ</sup>開<sup>かい</sup>祖<sup>そ</sup>さ<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>親<sup>おや</sup>孝<sup>こう</sup>行<sup>こう</sup>な<sup>な</sup>姿<sup>すがた</sup>は、<sup>は</sup>町<sup>まち</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>評<sup>ひやう</sup>判<sup>はん</sup>にな<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>な、<sup>な</sup>十<sup>じゅう</sup>二<sup>に</sup>歳<sup>さい</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>に<sup>に</sup>は、<sup>は</sup>そ<sup>そ</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>お<sup>お</sup>殿<sup>との</sup>さ<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>表<sup>ひやう</sup>彰<sup>しょう</sup>さ<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>ん<sup>ん</sup>じ<sup>じ</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>と。

モン えー!? お<sup>お</sup>殿<sup>どの</sup>さ<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>て、と<sup>と</sup>ー<sup>ー</sup>つ<sup>つ</sup>ても偉<sup>えい</sup>い<sup>い</sup>人<sup>ひと</sup>だ<sup>だ</sup>よ<sup>よ</sup>ね。そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>表<sup>ひやう</sup>彰<sup>しょう</sup>さ<sup>さ</sup>れた<sup>れた</sup>ん<sup>ん</sup>て、開<sup>かい</sup>祖<sup>そ</sup>さ<sup>さ</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>て、小<sup>こ</sup>さい<sup>さい</sup>こ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ほ<sup>ほ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>に<sup>に</sup>す<sup>す</sup>ご<sup>ご</sup>い<sup>い</sup>人<sup>ひと</sup>だ<sup>だ</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>んだ<sup>だ</sup>ね。私<sup>わたくし</sup>も、こ<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>し<sup>し</sup>ち<sup>ち</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>い<sup>い</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>な<sup>な</sup>い<sup>い</sup>わ! <sup>わ</sup>じ<sup>じ</sup>ゃ、<sup>じゃ</sup>お<sup>お</sup>じ<sup>い</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>ん<sup>ん</sup>、ち<sup>ち</sup>よ<sup>よ</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>待<sup>まち</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>ね。

おじい え? <sup>え</sup>ど<sup>ど</sup>こ<sup>こ</sup>行<sup>い</sup>く<sup>く</sup>ん<sup>ん</sup>じ<sup>じ</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>。



ん！モとしりたい

# おおもと

××××★××× ②

開祖さまは小さいころから立派な方で、お殿さまから表彰されたことを聞いたモンちゃん。突然おじいちゃんの部屋の掃除を始めたり、お茶を入れてあげたりと、開祖さまのお話に、さっそく刺激されるモンちゃんなのでした。



モンちゃん



おじいちゃん



おじい はあ、モンちゃんの入れてくれたお茶、とつてもおいしかったよ、ありがとう。  
**モン** 良かった！ ねえ、おじいちゃん、開祖さまはそれからどんなふうにな大きくなったの？  
**おじい** おお、そうじゃったの。  
 その後も、開祖さまはいろいろな奉公先で一生懸命に働かれ、十六歳のときに、家に帰られた。それから、お母さんであるそよさまを助けるため、これまた熱心に働かされたそうじゃ。  
**モン** うん？ ちょっと

待って。開祖さまはずっと働いてるみたいだけど、いつ学校に行ってたの？  
**おじい** よく気が付いたの。実は、開祖さまは学校：この時代は寺子屋と通われることはなく、文字の読み書きも習ってはもられないんじゃ。  
**モン** えー！ じゃあそれだけ、ずーとがんばって働いてたってことなんだね！



モンね、  
 ころがめあはるの...  
 わきわき  
 わきわき  
 きん、あはる...



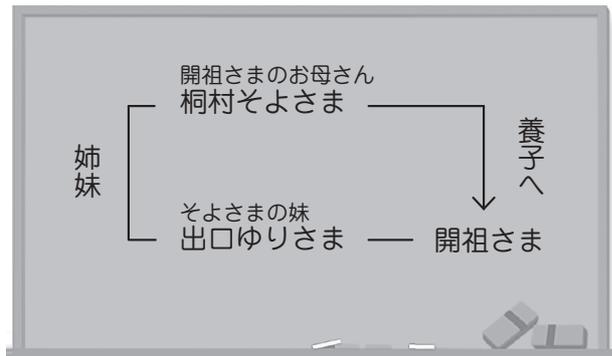
「おんしん びんご」

**おじい** たとえ学校に行っていないなくても、奉公先でのいろいろな体験は、開祖さまにとつて、勉強以上に貴重なものとなつたんじゃない。

**モン** なるほど。それから、それから？

**おじい** 十七歳になられた開祖さまは、お生まれになった福知山から綾部に住まわれることになつた。そういうえば、モンちゃんはお開祖さまのお名前を知っているかい？

**モン** 知ってるよ。前におじいちゃんに聞いたもん。出口なおさんでしょ。  
**おじい** ほほお、正解じゃ！ でも、出口という名字は、この綾部に移られてからなんじゃ。もともと、桐村なおというお名前だったんじゃないよ。  
**モン** なんて変わったちゃっ



なるほど なるほど

たの？  
**おじい** フム、それはな、開祖さまのお母さんの妹さん：つまり、開祖さまの叔母さんの家に養子に入られたからなんじゃ。モン 養子って？

**おじい** 簡単にいえば、その叔母さんの子供になるということじゃな。叔母さんにはお子さんがいなかったから、開祖さまに出口の家を継いでもらいたかったんじゃない。

**モン** へえ、そんなことできるんだね。

**おじい** また一つ、かしこくなつたの。(笑)。

そして、綾部に住まわれるようになった開祖さまは十九歳のときにご結婚。お相手は、それはそれは腕の良い大工さんで、政五郎さんという方じゃ。

**モン** それからは、赤ちゃんが生まれて家族も増えて、にぎやかに楽しく暮らしたんでしょ？

**おじい** そうならよかつたんじゃないがの……。

**モン** え、なにになに？ なんなの？



おちつくしや、モンちゃん……

それからさーしね、ね、ねー

教主さまたちについて、分からないこと、疑問に思ったことは、どんどんお手紙で送ってね。待つてまーす！！  
 〒621-8686 亀岡市天恩郷  
 「みろくのよ」編集室  
 「もつとしりたい おおもと」係



がお好きだったようじゃな。昔は、いろんな所で芝居をしながら旅をする旅興行というものがあつたんじゃが、それに付いて行つたきり二週間ほど、家に帰るのを忘れていたこともあつたそうじゃ。

**モン** わぁ、それじゃ、お仕事もできないね。

**おじい** そうして、生活が大変になっていく中、よねさんの次となる、ことさんと、その二年後には男の子の竹造さん、さらには三女のひささん、次男の清吉さんがお生まれになつたんじゃ。

**モン** わぁ、大家族だね！ ご飯とか食べ物だつてたくさんいるのに大丈夫なの？

**おじい** 大丈夫ではないの。その後、開祖さまご夫婦は、住み慣れた家

を売つて、小さな家に移られたり、十六歳になつたよねさんと、十歳になつたことさんをそれぞれ奉公に出されたりしておる。

**モン** 開祖さまが子供のころにしていたことと一緒だね。

**おじい** そうじゃな。そして、開祖さまご自身も、お豆腐やおまんじゅうを作つて商売を始めておられる。このおまんじゅう作りは、子供のころ、奉公先で身に付けられたものじゃよ。経験が役に立つたんじゃ。

**モン** へー！ 奉公つて、とても良いお勉強になつたんだね。

**おじい** そして開祖さま四十一歳のときには三男の伝吉さん、三年後に四女のりょうさんがお生まれになつた。

**モン** え、えー！ 一休何人家族なおお。えつと、えつと……。よねさん、ことさん、竹造さん、ひささん……。

**おじい** まあ、それから四年後には、八人目のお子さまをお生みになるんじゃがの……。

**モン** ……。



子供が7人で、9人家族が～



なんごころ

だから十人家族じゃの

# おおもと

ん！もどしりだい

××××★××× ④

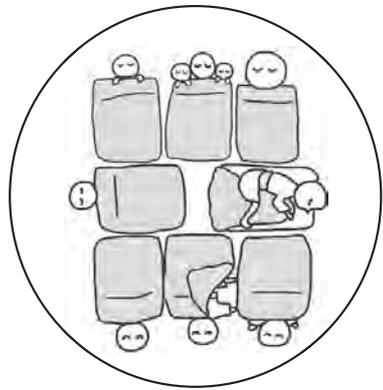
開祖さまに、たくさんのお子さまがいたことに驚いたモンちゃん。さらに、`8人目がお生まれになった、というおじいちゃんの一言に、またまたびっくり仰天！ 開祖さまの生活のご様子は、モンちゃんにはなかなか想像できない世界の様ですね。



モンちゃん



おじいちゃん



みんなどうやって寝てたんだ?



モン おじいちゃん、今、何と…？  
おじい だから、八人目のお子さまが生まれたんじゃないよ。名前はすみ子さまじゃ。  
モン きょうだいがあるにいてるなんて、私には想像できません…。

おじい アツハハハハハ。確かに、今の時代じゃ想像できるの。でもまあ、昔としては珍しくないことじゃ。  
モン そうなんだね。  
おじい 実はな、その末っ子のすみ子さまが、後に大本の二代教主さまになられるお方なんじゃ。  
モン そうなんだ。  
おじい まあ、二代さまのお話はまた今度。開祖さまのお話に戻そう。  
お子さまはたくさんおられたが、すみ子さまがお生まれになったころには、家には清吉さんとりょうさんとすみ子さまの三人だけじゃった。  
モン みんなどこ行っちゃったの？  
おじい 大きいお子さまたちは、ご結婚されたり、働きに出られたりしたん

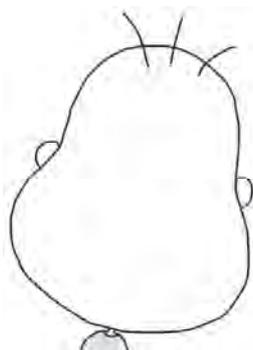
じゃ。

そうやって一緒に住む家族は減ったが、生活が苦しいことには変わりなかった。開祖さまは生活費を稼ぐために、赤ちゃんのすみさんを抱っこ、四歳のりょうさんをおんぶしながら、お米を引いて粉にし、おまんじゅうを作っておられたんじゃ。あみがさ餅、といったんじゃよ。



こいざ、大変だ...

そうめんで、大変なんぞ。



モン わあ、開祖さまで、おまんじゅう作りの名人ね!

おじい そうじゃなく(笑)。

そのあみがさ餅を、清吉さんが売歩かれ、そのお金で雑炊を作るためのお米を買ったり、次の日に作るおまんじゅうの材料を買ったりしておられたんじゃよ。

モン 家族みんなで協力し合ってたのね。

おじい おまんじゅう作りだけじゃないぞ。開祖さまはげたの鼻緒を作ったり、夏になると亀岡の方にも、働きに出られることもあったんじゃ。

モン 亀岡の大本に行っただけじゃないぞ。行ったことがあるけど、けっこう遠かったようない。

おじい そうじゃ。今は車があるが、それでも一時間はかかるなあ。

そんな遠い所に毎日通うわけにはいかず、一カ月もの間、幼い子供を置いて泊まりがけで働かなければならなかった開祖さまのお気持ちは、想像もできないくらい、つらいものだったじゃろう。

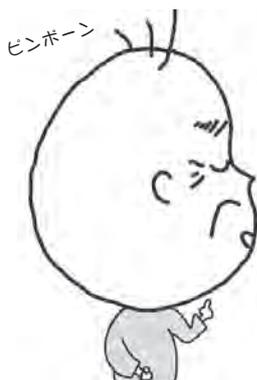
モン お母さんもないのに、長い間ちゃんとお留守番してた子供たちも

すごいなあ。私だったら、寂しくて泣いちゃうな。

おじい もちろん、お子さま方だって寂しかったじゃろうなあ。それでもがんばって、みんなで助け合って過ごされておったんじゃな。



教主さまたちについて分からないこと、  
 疑問に思ったことは、どんどんお手紙で  
 送ってね。待つてまーす!!  
 〒621-8686 亀岡市天恩郷  
 「みろくのよ」編集室  
 「もっとしりたい おおもと」係



ピンポン

みろくのよ



亀岡まで、歩いて行ったことごとく



おじい そつじやなあ。  
モン それからどうしたの？

おじい 寝たきりの政五郎さんの看病と子供たちの世話、そして仕事と、さすがの開祖さまも手が回らなくなってしまうわ。そこで、家を出ておられた、十七歳のひささんと呼ばひ戻されたんじや。

モン 政五郎さんのことも心配、子供たちのことも心配、開祖さま本当に大変ね…。

おじい だからといって弱気になってる場合じやない。生活を支えねばと、開祖さまは紙くず買いを始められたんじや。

モン 紙くず買い？

おじい 家や店を回って、使わなくなった紙を売ってもららうんじや。その紙を、今度は紙屋さんに売っ

てお金にするんじやよ。

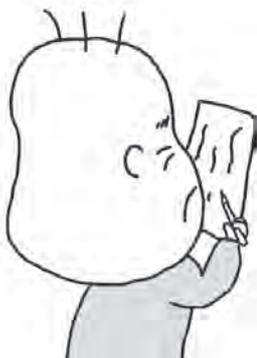
モン 古い紙を買ったり、売ったり…。何のためにそんなことをするの？

おじい 古い紙をまた新しい紙に作り直すためじや。まあ、今でいう古紙回収じやなあ。モンちゃんのお母さんもよく、新聞や雑誌をまとめて回収日に出しに行くじやろ？

モン そういえば、私も



リサイクルして、昔からあつたのね



広告やチラシの裏も活用できるぞー！ここで一回…

お手伝いしたことある！なるほど、こんな昔から同じようなことをしてるんだね。

おじい 今は車で簡単に集めたり運んだりできるが、開祖さまは十キロ、二十キロの道のりを歩いて家々を回られ、帰ってくるのはだいたい夜の八時を過ぎていたそうじや。

モン そんなに遅くまで…。きっと、子供たちもたくさんお手伝いしてくれたのね。

おじい そつじやなあ。朝出掛けるときには、お子さま方に「家のまわりに草を生やさぬよう掃除をしておいてくださいよ。フラ一本でも他人さまの物には手をかけてはなりませんぞ」と毎日同じことを繰り返して、優しい笑顔を見せて出掛けられたそうじや。

きょうしゅう  
教主さまたちについて分からないこと、疑問に思ったことは、どんどんお手紙で送ってね。待つてまーす！！  
〒621-8686 亀岡市天恩郷  
「みろくのよ」編集室  
「もつとしりたい おおもと」係



きれいにあつるって、やつぱり大切よね



掃除回

ん！もどしりたい

# おおもと

××××★××× ⑥

政五郎さんの看病や子育て、仕事と、休む間もないほど忙しい開祖さまでしたが、そんな中でも、身の回りをきれいにすること、人の物に手をかけないことなど、優しく子供たちに諭されたお姿に、モンちゃんも心を動かされるのでした。



モンちゃん



おじいちゃん



おじい 相変わらず、ご苦労の多い開祖さまじゃが、こんなエピソードがある。生活費を稼ぐために朝早くから夜遅くまで、働かされた開祖さまを気に掛けたら、三女のひささんが、「お父さんがいないほうが、お母さんも少しは楽になるだろうに...」と、つい、つぶやかれたそうじゃ。

モン それだけ、ひささんも開祖さまのことが心配だったのね。

おじい しかし、その言葉を聞いた開祖さまは、「なにを言うてや。あんたらのお父さんと呼べる人は、

天にも地にも、金のわらじで探しても、このお父さんの他にはないのじゃ。病気は看護が第一、看護が悪いと治る病も治りませぬ。あんたはお世話にいた（飽きた）か知らんが、私はまたまたお世話が足りないと思っています。後で悔やむことのないように、一生懸命お世話させてもらいましよう」と、厳しい口調で諭されたそうじゃ。

モン 本当ね。私のお父さんとお母さんも、世界



私のお父さんとお母さんでーす

わしも、感謝せねは…



中探したって、ここにしかいないもんね。

**おじい** そうじゃな。開祖さまが、政五郎さんに誠心誠意、真心を込めて尽くされていたということがよく分かるお話しじゃな。

**モン** 政五郎さんも、きつとうれしかっただろうなあ。

**おじい** 寝たきりになって間もないころは、梨が食べたいとかお酒を飲みたいとか、気ままなことを言われていたようじゃが、開祖さまのお姿に、さすが

の政五郎さんも、そんなことは言えなくなったところで、毎朝、仕事に出られる開祖さまの後ろ姿に、手を合わせるようになってきたそうじゃ。

**モン** 開祖さまの一生懸命なお世話が、心にジーンってきたのね。

**おじい** しかし、政五郎さんの病状は、日に日に悪化してしまった。ある日、政五郎さんが「永う世話してくれただが、もう死のうやもしれんで…。この世の名残にもう一杯お酒が飲みたいがなあ」と力ない声で言われたそうじゃ。

**モン** 政五郎さんは、もう死ぬかもしれないって自分で分かったの？

**おじい** そうかもしれないのお。政五郎さんの言葉を聞いた開祖さまは、手元に全くお金がなかった

んじやが、なんとか知人にお金を貸してもらい、お酒を買って家に帰られ、政五郎さんに飲ませてあげたそうじゃ。

**モン** すごく、おいしかったんだろうなあ…。

**おじい** 「ああ、うまい。これで思い残すことはない」と言われたそうじゃ。そして、それから数日後、六十歳で、政五郎さんは亡くなられた。

**モン** 開祖さま、とっても悲しかっただろうね。私も、なんだか寂しくなってきた…。

**おじい** そうじゃなあ、結婚されて三十二年間も一緒にいられたんじやからなあ。

それでも、まだ幼い子供たちを育てなければならんからのお、いつまでも悲しんでるわけにはいかん。

**モン** 開祖さまの忙しい毎日、それからもずっと続いたのね…。



開祖さまのつめいお茶



きょうしゅう  
教主さまたちについて分からないこと、疑問に思ったことは、どんどんお手紙で送ってね。待つてまーす!!

〒621-8686 亀岡市天恩郷  
「みろくのよ」編集室  
「もつとしりたい おおもと」係

# おおもと

ん！もどしりたい

××××★××× ⑦

夫である政五郎さんを亡くされ、悲しみに包まれる開祖さまご一家。しかし、それを乗り越え、一家を支えるため日々、懸命に仕事に励まれる開祖さまの強さに、モンちゃんは驚くばかり。そして、いよいよ大本の始まりへと話は進みます。



モンちゃん



おじいちゃん



おじい そんな忙しく大変な毎日でも、開祖さまは決してくじけることはなかったそうじゃ。

モン とても強い人だったんだね。

おじい 精神力も体力も、とてもたくましいお方だったんじゃない。そして、とても信仰的であったと記されておる。

モン そりゃ、大本の開祖さまだもんね。

おじい 今までの話は、まだ大本が始まる前じゃ。

モン あ、そっか。

おじい 開祖さまは道端に落ちていた稲穂を見つけると、必ず拾って帰られる。

モン お仕事をたくさんしたら、お水に恩返しできるの？

おじい うーん、どう説明したらいいかのお。縫い物をするのが、直接、恩返しというのではないかもしれないが、ありがとうございます」という



た。天地のお恵みで実ったものを、踏みつけてはもつたない」というお気持ちからじゃ。さらに、お水のご恩はなかなかお返しすることはできないが、なんとかそのご恩に報いたいと、大みそかには夜を徹して、縫い物などの仕事に励まれたそうじゃ。



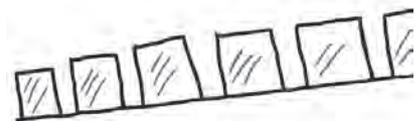
感謝の気持ち、形に表されたんじゃないかのお。  
**モン** ふん、なるほど。  
**おじい** モンちゃんには少し難しかったかなあ。  
**モン** 何となく分かったような気がする…。  
**おじい** まあ、そのうちしっかり分かるようになるじゃろ。  
 それから、日々の身だしなみも、崩されることはなかった。  
**モン** 身だしなみって？  
**おじい** 乱れることなく、きれいに着物を着るとい

うことじゃ。木綿の粗末な着物でも、開祖さまが着ると、立派な着物に見える。と、近所の人からも評判で、いつでも清潔感にあふれておった開祖さまは、幼い二代さまにとつてとても誇らしかったそうじゃ。  
**モン** 自慢のお母さんだったのね！  
**おじい** そういことじゃな。  
**モン** 強くて、優しく、きれいで…、ああ、開祖さまに会ってみたいなあ。  
**おじい** はっはっは。それはちよつと無理じゃなあ。でも、朝夕のお参りの後には、開祖さまや歴代教主・教主補さまたちのお写真にいつもごあいさつしておるじゃろ。  
**モン** まあ、そうなんだけど…。

**おじい** お会いしているつもりで心を込めてごあいさつしてごらん。きつと、モンちゃんのお持ちは開祖さまに届くと思うぞ。  
**モン** ほんとにっ？！  
**おじい** もちろんじゃ。  
**モン** よし、今日からしてみよっと！  
**おじい** そうじゃな（笑）。  
 ということで、モンちゃん。いよいよ、大本の始まりの時間が近づいてきたぞ。  
**モン** え？ なになに？ 大本って、そんなに急に始まったの？  
**おじい** そうじゃのお。開祖さまにとつても、お子さま方にとつても、それは突然のことじゃった。  
**モン** え、なんだかドキドキするなあ。早く聞かせて〜。



教主さまたちについて分からないこと、疑問に思ったことは、どんどんお手紙で送ってね。待つてまーす！！  
 〒621-8686 亀岡市天恩郷  
 「みろくのよ」編集室  
 「もつとしりたい おおもと」係



あ、  
 ぐんぐんお話ししよう…

天地のお恵みへの感謝を忘れず、どんなときでも信仰的であった開祖さま。そのお姿を想像しては、`会ってみたいなあ、と憧れを抱くモンちゃんでした。そして話は大本の始まりへ。開祖さまに起こった不思議な出来事に、モンちゃんは興味津々！



モンちゃん



おじいちゃん



モン 突然ってどういうことなの？

おじい 明治二十五年、今から百二十六年前の旧正月元旦のことじゃった。旧というのは、昔の暦じゃ。今のカレンダーより一カ月ほど時期が早いんじゃ。

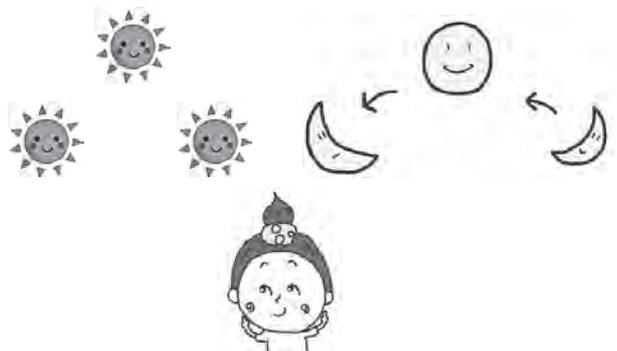
さて、開祖さまはその夜、突然、かぐわしい香りに包まれたそうじゃ。

モン かぐわしい…？

おじい 良い香りということじゃ。そして、例えよのうのない美しい宮殿を歩き、尊い神々さまたちと出会う…そんな夢を毎晩のように見られたんじゃ。

モン へえ、なんだかすてき。

おじい そんなことが数日続き、旧一月五日、今のカレンダーなら、ちょうど二月三日の節分の夜に、開祖さまの体の中に、神さまが入られた。そして、「三せんせかいいちどにひら九うめのはな もとのかみよにたてかえたてなをすぞよ すみせんさんにごしをかけうしとらの



新暦は太陽の動きに、旧暦は太陽と月の動きに基づいて作られたカレンダーなんだって

「こんじんまもるぞよ」と、  
声を発せられたんじや。

**モン** それはどういう意味なの？

**おじい** 簡単に言うると、  
今の世を、良い神さまが  
治めていたころの、元の  
平和な世界に戻す」とい  
うことじゃな。

**モン** この世界は、もともとはその神さまが治めていたの？

**おじい** そうじゃよ。この宇宙を創られたんじやからな。

**モン** へえ、神さまって、すごいんだねえ。

**おじい** そうじゃなあ（笑）。

しかしじゃ、この宇宙を創られた国常立尊という神さまは、間違ったことが嫌いで、とても厳しい神さまだったんじや。他の神々さまは、その厳しさに対

して、徐々に不満を持つようになり、とうとう国常立尊さまを、遠い所へ押し込めてしまった。それ以来、この世の中は乱れ始めてしまったんじや。

**モン** え、ひどいことするな。

**おじい** その押し込められた方角が東北：すなわち辰という方角じゃったから、この神さまは「辰の金神」と呼ばれるようになったんじや。

**モン** それじゃ、辰の金神さまがもう一回、平和な世の中にするために、開祖さまの中に入られたって



わけね。子供たちも、びっくりしただろうね。

**おじい** そうじゃなあ。寒空の下、井戸端で一心に水をかぶってお清めされているお母さんを目にした、りようさまとすみさまの驚きは大きなものじゃったろうな。

**モン** いきなり体の中に神さまが入ってきて、開祖さまはどんな感じだったのかなあ。

**おじい** もちろん開祖さまが一番、驚かれたじやろ。開祖さまの体を使って、神さまが話されるときは、男の人の声で、抑えようと思っても勝手に声が出てくるそうじゃから、それはそれは困られたじやろうなあ…。

それじゃ、大本が始まってからの開祖さまのご様子も少し話すでしょう。



神さまがこの宇宙を創られたんだね～



きょうしゅ  
教主さまたちについて分からないこと、  
疑問に思ったことは、どんどんお手紙で  
送ってね。待ってまーす！！  
〒621-8686 亀岡市天恩郷  
「みろくのよ」編集室  
「もつとしりたい おおもと」係

# ん！モトしりだい

# おおもと

××××★××× ㊟

節分の夜に起きた不思議な出来事。最初は戸惑われた開祖さまですが、徐々に神さまのご存在を確信し、ご用にお仕えすることを誓われます。そしてそのご用は今もなお、大本信徒にとって大切なものであるということ、モンちゃんは初めて知るのでした。



モンちゃん



おじいちゃん



おじい ーご自分の身に起こっていることに対し、開祖さまは悩まれた。  
モン そりゃそうよね。  
おじい ーあなたは何者ですか？と質問されると、この方は良の金神であるとの返事が返ってきた。そうやっていろんな問答を重ねられたんじゃ。  
モン 他の人からは、開祖さまが独り言を言っているみたいに見えただろうね。  
おじい そうじゃなあ。近所の人たちは、「なおさんも気がおかしくなったか」と心配したそうじゃよ。しかし、良の金神さ



筆が勝手に動いって  
とれぬ感じなんだろう～



ワシにも分からん…

まの訴えておられることを聞いていううちに、開祖さまは、この神さまは正しい神さまだと、徐々に信頼されるようになってきたんじゃ。  
モン 平和な世の中にするぞっていうことを言われていたんだよね。



じゃ、十万枚って、

**おじい** その通りじゃ。それでもやはり、周りの目は気になる。そこで開祖さまは神さまに、「大声で叫ぶのをやめてほしい」と頼まれたんじゃ。すると神さまは、「それでは筆を持って」とおっしゃった。**モン** なるほど！ 文字で伝えるってことね。でも開祖さまって、小さいころからずっと働いてたから、学校に行ってなくて、字も習ってないんじゃなかったっけ？

が、「そなたが書くのではない。神が書かすのだ」と言われた。これが、お筆先の始まりとなったんじゃ。**モン** 叫ばずによくなつて、開祖さまも一安心ね。**おじい** このお筆先は、大本が始まった明治二十五年から、二十七年間にわたって書かれ、半紙十萬枚にもなったそうじゃ。**モン** 十萬枚！ って、多すぎて、よく分からな

いんだけど…。**おじい** ははは。確かに想像しづらい枚数じゃのお。神さまはそのくらい必死に、どのようしたら平和な世の中になるかということ、人々に訴えられたということじゃ。そして、この神さまのお言葉を世界中の人たちに伝えることが、今なお、大本の人にとっての大切なご用なんじゃよ。**モン** じゃあ、おじいちゃんもおばあちゃんも、お父さんもお母さんも、みんな神さまのご用をしてるんだ。**おじい** モンちゃんだった、これから大切なご用が待っておるんじゃよ。**モン** そうなのかなぁ。がんばらなくっちゃね！**おじい** そうじゃな(笑)。さてモンちゃん、開祖さまと一緒に、もう一人、大本を作られた方がおるんじゃが、分かるかな？**モン** え、そうなの？**うくん、誰だ？****おじい** じゃあ次は、その方についてのお話じゃ。

教主さまたちについて分からないこと、疑問に思ったことは、どんどんお手紙で送ってね。待つてまーす！！  
〒621-8686 亀岡市天恩郷  
「みろくのよ」編集室  
「もつとしりたい おおもと」係



うん…  
いったい、誰なんだ？